

## 龍南

## 行路放言

○たどつびろい曠原で唸る様なもので斯んな處で力み返つて論じたつて何になるだらう、喧嘩腰でかゝつて來る程痛快な反響があるなら言ふ吾々も少しは氣持が佳のだけれど沈香も焚かず屁もたれず、何處をなぐつてもうんどもすんども吐かさぬ奴ほど氣のしれぬものはありはしない偉いのか小さいのかそれさへわからぬ、五高は實に煮わたとも焼けたとも知れぬ連中の群集である。

○体裁よく學問の名の元にかくれてゐればこそ色魔も、しみつたれなげちんぼも、酒喰ひも、全じ様に書生と言ふ帽子をかぶつて大道を潤歩せられるけれど裏通りに出て來るとやつぱり世の中の一部分に生きてゐる人間に少しも違つた点は認められない。

『……暫し五高はかりの宿』とは良く吐かしたものである。然もそう言ふ様に社會と學校との區畫線を

ぼんやりと細めて行くのは一圖に書生ばかりの罪ではなくて社會の罪だ、なんかと野暮な議論も今更初まつた事でもあるまい。

○だから盜人探索の懸賞や、不屈物を嗅ぎあるく探偵が設けられるのだつて少しも奇異な現象ではあるまい、かゝる事實は學校を普通の社會と全視する証據として益々有力な現象である。玆で槍玉をあげたつて致方がないからよすけれども學校でも社會と全じ様な犯罪や取締策が色々起つてゐる。一寸裏口からのぞいた者は容易に色別する事實であらう。斯うして考へて行くにつくつく書生と名の付く境遇が情なくなる。

○そんなら毎日々々書物に噛みついて赤丸を天罰の様にをのゝき怖れ、小心翼翼、青虫か菜つばの様な面をしてたきん玉とたべつかで、毎日七面鳥の様にうろたへ廻つて居れば佳い様なものだけれど浮世に息をする以上はそんな極端な馬鹿げた事をする途を今の書生は余り通り過ぎてゐるから仕方がない。其の中の例外としてしみつたれな慾道ものは内所で胸算用をして優等生になり又た余り浮世の方に傾く者

は落第したり放校を食つたりする様になる。間でぶらつく連中は佳き面の皮である。

○ごつち付かずだから悪まれ調子で益々壓迫せられる「瓶づめ」と言つたら佳いだらうか「ラムネ」と言つたら佳いだらうか。斯うして互に睨みあつて、あげくの果ては當局者も書生も互に誤解しあつて、年から年中がたひち／＼と生傷を見ねばならん、斯んな處を教育界とはどの口でぬかせるのだらう。萬朝にも出てゐた。「七高の校長の生徒の禁酒勵行まではよかつたけれど其の監督の名の元に行はれる教員の料理屋の仲居の顔を覺わたり、放律な行爲に流れたりするのには少しも目が行き屈かんで益々全校の感情は荒んで行くげな」と七高ばかりでもあるまい、是れは當今の教育界の通弊だ。

○それからだ。それからそうと教育界が泥水だと感じた吾々は如何する。大學に入るにも試験が設けられるとは約束しなかつた。試験ぐらいごうなつたつて屁とも思ひはしないけれど無邪氣であるべき吾々を段々惡癖をつけて行く教育界に對してごんな腰かがへで行けば佳いかそれが問題だ。

○言つてやらうと言ひたいけれど今の處勝手に行くが佳いとの外、結めようがない。くゞられてるから。

○商賣氣を離れた眞面目な、有徳な教育者と明瞭きりした學校と社會の垣がつかん以上學校は畢竟浮世の一部分で泥水の濁りに變つた事はあるまい。渡り上手な男は先生からも贊められ、勝手も都合も調子よく行つて所謂屁の様な立派な出世が出来るのだ。

學問さへ出来れば品行も方正、体操点も九十点ぐらいはねらはれる、追手に帆を巻き上げた千石舟の形とは此の事だ。

○ほんこに思ひもそめなかつた。渡り上手が學校でも勝つて行くものであつたとは、だからそのつもりで勝手に行けとは此の邊の呼吸をしつてからの上の事である。と註釋をつけて置く。

○最う熊本にもあいて終つた。モノトナスからモノトナスに續いて何處まで行けば浮ぶ瀬があるのだから短氣な吾々は發車前の人待ちのじれつたさの様な心持ちで此のアトモスフエヤーに辛捧せなくちやならん此のムードは東京邊にごろつく頑癪家が、強い刺戟を求めて新しく追つて行くのとは觀念がち

がつてゐる、けれども最う後二月である。

○で改まつて後から來る人達に言ふ随分達者で御辛棒なされませと。是れが果敢なき置土産だ。

○終りに自分は龍南會と言ふ豚の様な怪物の一部分たる雜誌部の一委員を承諾した最初の無定見な自分の拙劣な行爲を恥ぢ悲しむ。渡り下手な自分は少なくとも此の一年間の徒勞を顧みて一種のつらい教訓を得たのを感じる即ちカーライルの向うを張つて「淺き處にも音楽あり」と言つて見たい。自分は斯うして一先づ筆を捨てるつもりである。(盡南生)

### 四月の夜の對話

人物 四人の書生

場所 上通町に近きさる二階の南に突出せる一室。

すべて去年五月十九日の夜「團體像ラコーコンの苦み」を生みしと全一の個所。

時 四月廿五日の夜。

周圍は何時か暮れたれど、思東なき黄昏の色は、淡き藍を流して、尙彼方の屋根に残る。小櫛兩爽に露れて、濕み帯びし初夏の風、もの柔かに庭の若葉を吹く。床の間には血の如き南国の花、電燈の光に搖ぐ。正幅に袴の四人は欄に近く座す。

第一の男。「あの男も此間たれをつかまいてね、近頃は雑誌が大分振ひますなつて云ふから、何處が振つてるのかつて聞いたたら、學校の悪口が澤山書いてあるからだそうだ。何でも學校の悪口さへ書いてありや其雑誌は振つてるよ云ふ議論らしいね」。

第二の男。「妙な前提に妙な結論だな」

第一の男。「それでね、もつと大に振ひ給へつてそう云つたせ。われも癪に觸つたから、そんなに無理に振はなくつても、五月雨になれば又マラリヤで盛に震ふんですから、安心したまへつて云つてやつたハハ……」

第三の男。「まだ震ふんかい。執固いマラリヤだな」

第一の男。「執固いとも。持病だあね……」とにかく皆、人を馬鹿にしてるよ。一と月も懸つて書いた論説や、眞面目な創作に對して誰も一言の批評もしないんだからな。其上不可解の一語で葬らうとする……」

第四の男。「今の五高生にあれの批評どころか、理解する頭も無いんだからな。情ないよ。所調一千の健兒は喰つて寢て、教科書に假名を附ける機械に過

きない」

第二の男。「所が其機械が、文句を云ふんだから仕末にたへない……上からごんな壓迫を加へられても公然立つて反抗する勇氣は無いんだ、其癖陰では何んの彼んのかつて、ブツ／＼云ふ……。まるで奴隷だね。不完全な教育制度の奴隷だ」

第四の男。奴隷だ。みんな奴隷だ。だから折角意氣を以て立つた自活も共同生活も、何時か奴隷の道徳に征服されちやつたんだ。そして校風と云ふ美名の下に飽く迄個性を壓服しやうとするんだ。」

第一の男。「いや、校風に權威の有つた時代はもう過ぎ去つたよ。あんな形式丈け残つた校風に權威が有つてたまるもんか。然し今の傾向を、壓迫を脱れ得た眞の自由と思ふと大間違ひだ。校風の柵を打壊したとしても、依然として奴隷は奴隷なんだ。本來の自我が下等の自我の奴隷になつてゐるんだ。所謂寄生虫的自我の爲めに、本來の自我が覆はれてゐる。だから其奴隷の間には、不徹底な享樂主義が流行するんさ」

第二の男。「今は校風を口の先きで論ず可き時代ぢや

ない。むしろ、各自志ある人が身を以て示す可き時と思ふよ。議論は要するに議論さ。實行の伴はない議論はしない方がましだからな」

第四の男。「實際さうだよ。校風論はた祭り騒ぎぢやないからな。——仲には自分の名を賣らんが爲めに校風論を振舞はす人間も居るんだ。無暗に剛健がつたり、周圍を罵倒したりすると、人が自分を偉く思つてくれるだらうつてな事を考へてゐるらしい。」

第三の男。「好くない心懸けた。ハツハツ……そして其を相手にしないと君は僕を誤解して居ると來るんだらう。誤解ぢや無い、正解なんだ。そんな偽物を正札のまんまで買ふ奴が何處に居るもんか」

第四の男。「さう云ふ連中は何時も新入生に多いね。つまり『吾一人澄めり』で云ふ奴さ、怖れ入るね」

第一の男。「そうしたら雑誌で所謂振つたれも、矢張『吾人一人澄めり』かね。ハツハツハ……怖れ入る」

三人「ハツハツハ……」

第一の男。「とにかくこれば不徹底な態度は嫌だ。享

樂主義も好いさ。然し飽く迄徹底的にやらなくちや嘘だ。一体學校は享樂主義に限らず、何から何迄みんな不徹底だよ。第一あの集會條令からが不徹底極まる物だ。許すんなら許す。許さないんなら絶對的に許さない方が好い。五十錢だなんて不景氣な條件を附けるから、凡てが形式的になるんだ。一層取締るなら極端に取締らなくつちや、實績が揚るもんか」

第二の男。「全くだ。當局者が倒れるか生徒が倒れるかつては處迄行かなければ駄目だよ。あんな消極的な態度で何になるもんか。」

第四の男。「然しそれは學校許りぢやない。凡てがそれだ。消極主義、事勿れ主義が現代なんだ。有ゆる成功の秘決は皆此處にあるんだぞうだ。堂々たる書生迄が夫に犯されてるんだから嫌になる現代尻を引懸けられても、イ、エ嗅くはありませんと云は無くちや出世が出来ないぞうだ。だから見ろ。成功した人の顔は黄色いぢやないか」

第一の男。「そこで其黄色い奴が、黄色い金切り聲を振り絞つて、黄色い光にペコペコ頭を下げんさ。」

今のやうに若い者迄ペコ／＼頭を平氣で下げる癖が附いたら、百年後の日本人皆背虫になつちやうだらう。」

第二の男。「少くとも頸の骨丈けは曲つたつ切り伸びまいね」

四人同時に笑ふ。中庭を隔てたる彼方の二階に正頼、袴の書生數名現る。

第三の男。「三年の奴等は今、みんな大學の夢ばかり見てやがる。大學生になるのが、あんなに偉く思へるのかな」

第二の男。「偉いと思ふ奴は思はして置くさ。五高の前を東へ向いて輕便の線路を傳へば、何時か大津へ出られるんだ。出る方が偉いんぢやない。出られるやうに出来てるんだ。其を出られないなら大馬鹿さ」

第一の男。「わらい新大學生諸君が三四郎を演じないやうに頼むせ」

第二の男。「全くだ」

彼方の二階に座する正頼連の中より、俗悪なる唄の聲、非音樂的に響き來る。

第四の男。「たい其はそうと、寮で唄ふ唄が學期々々に變つて來るね。一學期は寮歌に、詩吟に、デカシヨだが、二學期から大分怪しくなつて、三學期には『まが好いでしょ』だ。又此頃はた富と興三郎が何んとかつてな奴が流行るぢやないか」

第一の男。「みんな嫌な唄だね。何故此頃の俗歌は彼麼に下品になつたんだらう。日露戰爭後は殊にさうだ。年々下司張つて行くぢやないか。もう明治も四十五年だぜ。徐々新しい文明の精を歌ふやうな唄が出たつて好きさうなものだ」

第二の男。「なゝに、まだく明治の文化は粗惡なものだよ。昔京の四季や夕暮を生んだ文化には到底比較にならないさ。今の文明は俗惡な、下劣な、全然亞米利加式になつた文明だよ。此麼文明の中から、碌な物が生れるもんか」

茲で話は一轉して熊本の文明に移る。第二の男は熊本の文明は年々北漸する。——唐人町から通り町に推移しつゝあると云ふ。第一の男は反抗の意見を持つ。

第一の男。「新代繼橋を貫いて東西に引いた様が熊本の新舊文明の境界線だ。其線から以北は、新しい

が、頗る俗惡な文明に犯されてると思ふね。其俗文明を代表して居るのが裁判所の建築だ。實に嫌な色だね。其に何だあの屋根は……とにかく古町邊は今でも、古い文化の堆積された名残が有るよ、古町を歩いて見ろ。風俗からして違ふぢやないか。何處かなつかしいステインムングが流れてる。確かに鍛練され、醇化された跡が有るよ。藤崎邊のやうな野暮な處は一寸も無いからな、……殘に若葉の雨の朝が良い。たれば此間から日曜の朝は何時もあの邊を歩く事に極めたよ……細工町の近邊を」

第三の男。「御苦勞さま……下駄がへるせ、下手をするど鼻緒がされるせ。」

第二の男。「鼻緒が切れりや『たけくらべ』だらう。みどりや赤い切れを持つて出て來てくれて、何が慕うて其様につれない素振りは見せらるるかハハ……」

第四の男。「大入道の『たけくらべ』か御免蒙るせ」

例の彼方の座敷の唄は益々俗惡を極む。間々最劣醜劣極語を發しては、賤し氣なる笑ひ聲を放つ。

第三の男。「實際奴等の話題は乏しいね、且つ賤しいね。無暗に強さうな事を云ふ剛健自慢か、生徒や先生の悪口か、試験の話だ。そして、其大多數に共通してゐるのか三五郎と女の話だ」

第一の男。「其賤の小田卷も女も、有ゆる美しい屬性を引抜いた、獸物としての賤の小田卷と女だ」

第二の男。「さうさ。奴等の手に懸ると、花のやうな三五郎も、可憐さうに、一塊の肉と變して了うんだ。性格としての女、人格としての女は、奴等の頭には考へられないと見ゆる。奴等の中には、お七も小さんも夕霧も區別が出来ないんだ。それで居て性格としての女を論じる柔弱だつて攻撃するんだからな」

第一の男。「それだから、不徹底な、然も潔いぢない享樂主義が流行するんさ」

第四の男。「でも此邊へ來るのは、まだ、遙かにおとなしい連中だよ。激しい奴は、取締りが八釜敷ければ八釜敷い程、下へ下へともぐつて、まるで土鼠宣しくだ」

第二の男。「其土鼠の群が怪しげなマドロスを中心に

しては、到る處に旋風を起すんだ。それが又はた互ひに喰つたり噛んだりして居るんだから、情ない。其癡學校は出され度くない。親父の信用は落し度くないと來て居るんだ。」

第一の男。「何故やるならもつと偉らしくやらないんだらう。眞のデカダンてのは、もつと遙かに男らしい態度の物と思ふがなあ。」

第三の男。「さうさ。若い者だ、遊ぶのも好い。然しやるなら飽く迄堂々と男らしくやるさ。むしろ學校なんか退學してやるさ。」

第一の男。「ほんただよ。淺黄に暮れ行く兩國橋の上で、貧しい鳥追の少女を見て、からりと大小を捨てた座光寺源之丞の態度でやるさ。『何の五千石君ぞねよ』……其處迄行かない位なら初からやらない方がました。中途半端は凡人のする事だ」

第二の男。「それちや君も矢張り、氣頼の美少年白井權八君を尊敬する仲間だね。」

第一の男。「馬鹿云へ。荷風ぢやないぞ、可憐さうに……」

第四の男。「だが君の説を押し詰めて行くと、心中を

する奴が一番偉人になる譯だね。親も捨て、名譽も捨て、命迄も捨て、一人の女の爲めに例れる。

戀の殉教者、紙屋治兵衛は偉人だね。」

第一の男。「馬鹿を云へ態度が違ふよ」

第三の男。「そんなら如何云ふ態度なんだ。」

第一の男。「もつと男らしいんだ。めそ、泣いて死ぬんぢやない。堂々と死んだ。……一寸説明しにくいね。まあ判官様が切腹するやうな態度でやるんだね」

第二の男。「へね。判官様が切腹するやうな態度で心中をする。こりや難しい。到底も出来ない」

第一の男。「無論われにも出来ない。出来ないから仕ないんだ。だから中途半端でぶら附くよりもむしろ御覽の通り退いて孤獨の裡に自己の光榮を守つてゐるんだ。光榮ある孤立した。孤立の裡に、自己の裡に、眞の生命を求めらるんだ。自己の裡に生きる——其處にベルグソンの哲學が生れるんだ。」

小さき下婢　ざるそばを載せし盆を持ちて登場四人座り直して  
箸を下す。下女階段の下に去らんとする時、大聲發して、

第一の男。「た代り——それにそばの湯をぐつつさり」

## 船越純一君を吊ふ

若い魂を大地の底に吸ひ込むやうな逝く春の小雨は、しめやかな音をたて、思東ない色に煙る黄昏の奥に、物のすべては悲しい紺の姿にじんだま、影をも止めず暮れて行く。じつと座つて眼を閉せば、物寂しさはひと身に添うて、私の血も命も、此儘ほろ／＼寒く朽ち果てるかと思はれる。

あゝ船越瓢郎君は遂に歸らぬ人となつたのか、若い命と、秀でた才と、望み多き將來とを、故里遠き東都の客舎に、空しく病の爲めに奪はれたのか。夢のやうな、夢でないやうな、云ひ難き佗しさは、頻りに私の心を侵す。

懐へば四年の昔である。私が熊本へ入學しに来る途中、大阪の友の家で、東都に赴く瓢郎君に逢つた。逢つたのは唯の一夜である。晩夏の暑い灯を圍んで、句に歌に文に、色々と心行く許り物語つた。其も今は傷ましき思出となつた。明けて二人は西と東に袂を分つたが、心は頻りに再會を期した。其も今は果敢なき夢である。四十年度の雑誌部委員として、流



麗紉瀾な筆に、盤上玉をまろばす響を傳へて、「俳道論」をかき、「陽炎」を書き、更に數多き文と、句とを物した。其も今は佗しき形見となつて、若くして倒れた才人の、あの小造りな優しい面影を偲ばすすがに過ぎぬ。

君は昨年七月、秀俊の成績を以て東京文科大學の史料を出て、芝の高輪中學に教鞭を執つて居たそう。若くして秀でた子を持つた、故里の人々の歡びを懷ひ、更に今の嘆きを想へば、哀愁の雲は尙深く私の胸を閉して、殆ど筆を執るに堪ぬ。

柳の影に物の怪の氣合を示した畫の女、春の宵のほの暗い灯しの前に我を嘲つた夜の女、名を百合子と云ふ百合子は夢の女である、百合子の夢は宵に結んで明け方に覺める、果敢ない類ではない。永遠に醒めぬ夢を見て、夢に見得た影に憧れる人である。眠れる人の腦裡に寫る幻のみを夢とは云はぬ、百合子の夢は、百合子の足が踏む所に宿る。夢の女が夢の國に永遠の生命を得たのは去年の秋の事だと云ふ(陽炎)

あゝ陽炎と燃わた瓢郎君の若き魂は、好く永遠の安きを得たであらうか。且ては狂女百合子の傷しき死を吊ふた其人も今又、若くして人に吊はるゝ身となつたかと思へば、更に私の近き未來も押し計られ

る。

淋しい夕暮である。三句の勞作に疲れた身を一人窓に倚せて、若き才人の傷しい跡を偲へば、其處とも知れぬ雨の音は頻りに私の心を脅して、ふと仰ぎ見る京町臺の、紫紺の色も胸にしみる。(渙生)

## 編輯の後に

◎愈々吾等の去る可き時が來た。思へばに省るだに堪は難きいな旅であつた。去年の今月のまさに今夜、東坪井の葉櫻を洩るゝ夕月に、就任の辭を書いて以來丁度茲に一年、斯くも苦しい且暮を重ね來やうとは、全く思ひもうけなかつた。

◎嗚呼人間生れて雜誌部委員となる勿れ。折角夜も寝ずに作つた雜誌は、何の反響もなく、空しく暗の中に黙殺される。斯る馬鹿氣なまれば、もう二度と再び、したくない。千々孫々にもさせ度くない死ぬ時には必ず遺言する決心である。

◎まあ漸くいやな仕事も片附いた。是から早寝も出来るよ云ふわけだ。兎に角投書欠乏の折柄、委員の手許りで是丈けの物を作り得た事を唯一の誇として、茲に壇を降る。

◎然し省みて事多く志と違つた跡を思ふさまことに、撫然たらざるを得ない。言論の束縛が、經費の欠乏が、吾等の無能が、其は知らぬ。兎に角思ふ様に充分腕を振へなかつたのは、千秋の恨事である。◎終りにのぞみて、一々年の間吾等を誘導せられし本田部長の御心勞を深謝し、且つ一千會員諸君の健康を祈つて最後の筆を擱く。

(五月一日夜、渙生)